The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Communication-Design 3 表紙
Author(s)	
Citation	Communication-Design. 2010, 3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/21605
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Communication-Design

異なる分野・文化・フィールド ── 人と人のつながりをデザインする

この本※について

※『Communication-Design』 通称 オレンジブック

――――コミュニケーションデザイン・センター

2005年4月に誕生した大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（以下、CSCD）は、「専門知識をもつ者ともたない者のあいだ、利害や立場の異なる人々のあいだをつなぐ、コミュニケーションの回路を構想・設計・実践すること」を目標に掲げて、多様な活動を行っています。その主たる事業は、全学の大学院生を主な対象としたコミュニケーションデザイン科目を提供する教育活動、社学連携活動、そして「コミュニケーションデザイン」にかんする研究に取り組むことです。この三つを柱として、多様な専門性をもったメンバーがそれぞれの専門性に閉じこもらずに、コミュニケーションにかかわるテーマや課題に対して、実験的な活動を行ってきました。この活動は、少しずつ社会の仕組みに組み込まれています。また、幾つかの活動は、新たな回路として社会に錨を下ろしつつあります。

――――経緯

本書『Communication-Design』は、CSCDの活動や研究の多くを吸収し、CSCDと社会との結び目を作る機能をもって、2006年度から編集されております。表紙の象徴的な色にちなんで通称「オレンジブック」と呼ばれ、従来の研究論文の形式をとったものから新しい表現を追及したものまで、多様な内容とそれを現す文体で表現されています。同時に、広報物としての機能も果たしています。

それは本書が、CSCDの活動を紹介する「第1部 特集」と「第2部 コミュニケーションデザイン論集」の2部から構成されていることにも起因します。とりわけ特集は、CSCD内での議論の変遷をなぞったものとして編まれてきました。

1冊目の0号では、各スタッフの紹介とともに、「私たちはどうしてここにいて、何をしようとしているのか」が、リレー方式で議論されました。2冊目（1号）は、一般販売も視野に入れ、CSCDの主たる事業である教育、研究、社学連携の3点を紹介するとともに、デザインにかかわる教員たちがCSCDでのデザインの課題について語らいました。3冊目（2号）では、社会の様々な場で使われるようになった「協働」という言葉をとりあげ、スタッフの個別の「協働」活動に焦点を当てつつも、それぞれの違いをもとに、関連する活動の全体が動いている様子を描くことを試みました。

このような本書の編集・制作は、CSCDが掲げるコミュニケーション回路の構想・設計のための一つのプロジェクトであり、それを出版することは、この回路を実験的に作動させることだとも考えています。

本書3号について

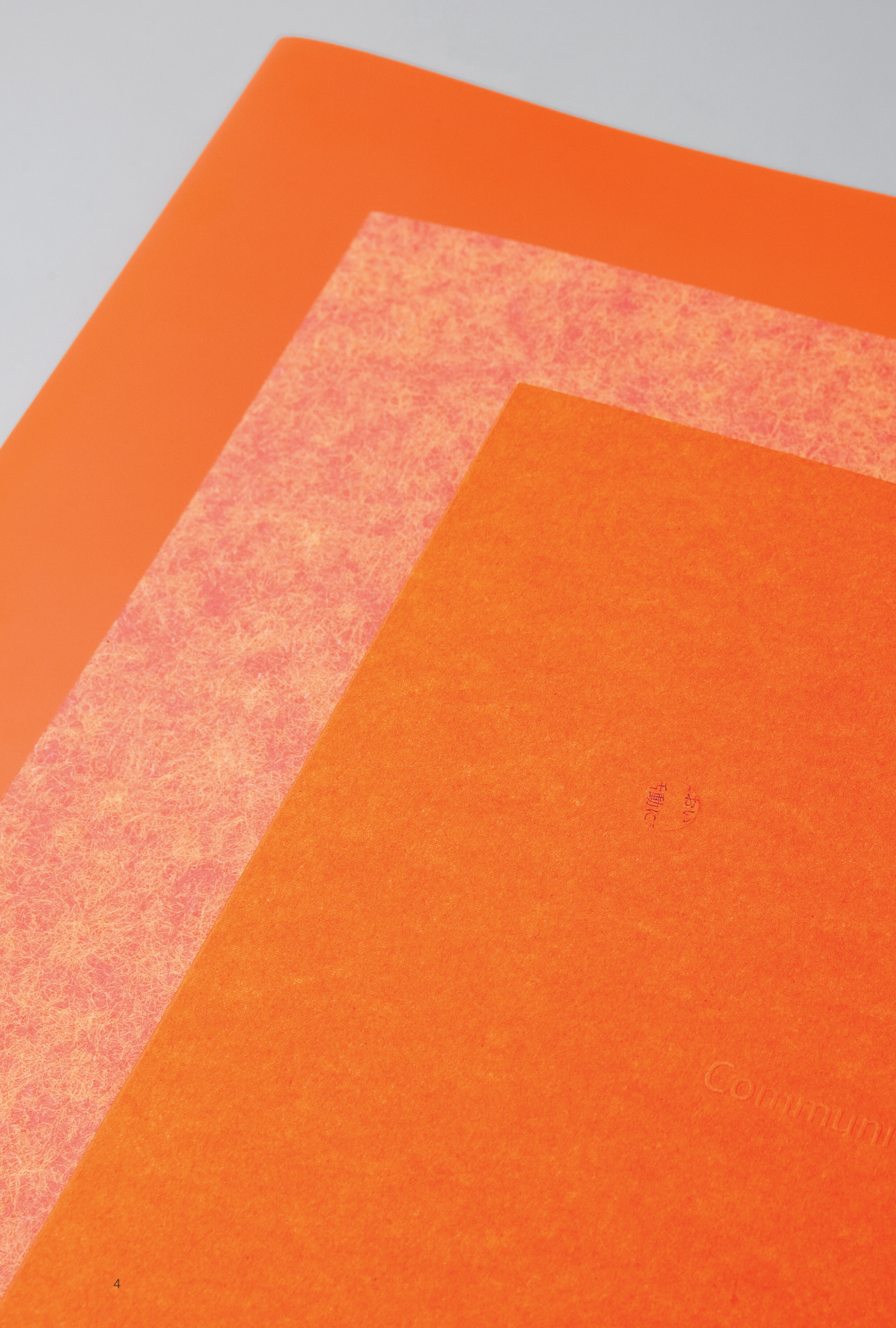
本号は、CSCD設立から5年目という節目の年にちなみ、これまでの多様な活動を、その実践者の視線から捉え直すことを試みた「特集号」として編みました。

CSCDの取り組みとして、例えば2006年度から開講しているコミュニケーションデザイン科目は35科目を数えますが、それぞれの授業の方法は多くの議論をもとに生みだされております。この議論自体がコミュニケーションデザイン研究として記載されてもいます。またCSCDでは、センターとして企画・運営を行う活動と各教員が外部資金を獲得して行っている活動を「プロジェクト」と呼んでおり、「サイエンスショップ」や「知術デリバリー（知デリ）」、学内外での対話の場としての「ラボカフェ」、「オレンジカフェ」などが進められてきました。これらのプロジェクトの多くは、社学連携活動として位置づけられていますが、この活動と教育、研究は緩やかに結びつき、新たなコミュニケーション回路を生み出してきた、それ自体も論じられています。コミュニケーションデザインにかかわる研究も盛り込まれていますが、これも社学連携活動や授業と切り離せないこととして議論されております。

そして、メンバー一人ひとりがそれぞれの仕方で試行錯誤を繰り返しつつ取り組んだ、コミュニケーション回路の構想や設計・実践を通して、メンバーたち自身も否応なく変化させられてきました。その経緯が論じられたり、語られたりしたものもあります。つまり、CSCDのメンバー自体が実験をする主体でありながら、その実験に取り込まれた素材でもあったのです。それを反省的に捉え返したのが、特集号としての『Communication-Design』3号です。

本号は、前号までの「特集」と「論集」とが合体した書物というスタイルではなく、集められた25編の、多様な表現で論じられた論集を、5つの枠組みに括って特集としました。これまでの2部構成の境界を取り払うことで、多様さをそのまま束ねて一つの書物となりました。CSCDの5年間を照らし出す25編の論考と、本書を手に取って下さった読者の方々とのコミュニケーション、つまり対話がいかに発展するのかを期待しています。またこの出会いが6年目以降のCSCDの活動へと繋がって行くことを希望します。

オレンジブック・プロジェクト


Communi

cation Design

目次

どこに相談すればいいのでしょうか
仲谷美江 10

大学でヒューマンインタフェースを学ぶということ
伊藤京子 20

「ディスコミュニケーションの諸相」
西川勝 32

「普通」を捉えなおす ――「現場力」の分析を通して
西村ユミ 44

ハイブリッドな秩序と人間の行為
山崎吾郎 56

［メッセージ］
CSCDがいらなくなる日　仲野徹 70

FIVE after FIVE
VIDEO ROMANTICA 74

阪大サイエンスショップからの提案 ―― 科学技術の新しい「楽しみ方」と公共性
平川秀幸 86

大阪大学サイエンスショップでの学び ―― 3つの疑問と回答
山内保典 100

総合大学の資産を運用して企てを画く ―― 社学連携による文化事業の研究開発
木ノ下智恵子 112

哲学という名のプラットフォーム ―― ラボカフェ／中之島哲学コレージュ
本間直樹　松川絵里 122

［メッセージ］
「重層性のある社会」の実現に向けて　～アートエリアB1の活動を通して～　大浅田寛 138

科学技術と社会をつなぐ「対話」のデザイン ―― 大学が対話の場をつくるということ
八木絵香 142

演劇はコミュニケーション教育に有効か？ ―― コミュニケーションデザイン・センターにおける演劇教育
平田オリザ 154

地球温暖化をめぐるコミュニケーションデザイン：WWViewsプロジェクト ―― 誰の声を取り出すのか
小林傳司 166

ノート　もうひとつの土木計画と社学連携
森栗茂一 182

最先端〈ではない〉研究を担うためのサイエンスショップ —— 我々が第三世界から学ぶべきこと
春日匠 192

［メッセージ］
21世紀の大学とコミュニケーションデザイン —— 社会における、社会のための大学　有本建男 206

実践を生み出す論理の可能性 —— 対話論ノート
池田光穂 210

旧大阪外国語大学・地域連携事業から 新大阪大学・社学連携事業へ
林田雅至 226

アート・アーカイブズ概論 —— 芸術学と情報理論の横断的教育実践
要真理子 238

Progressive Inclusive Design
川崎和男　金谷一朗 250

減災におけるコミュニケーション
関嘉寛 262

［メッセージ］
「いちびり」　大和谷厚 278

行動デザイン学の提案
平井啓 282

A Designwork Orange —— デザイン仕掛けのオレンジ
デザインプロジェクト：久保田テツ　清水良介　花村周寛　本間直樹 290

ネットワーク型組織をいかに表現するか？ —— CSCDウェブサイトのリ・デザインから
平井啓　清水良介 304

コミュニケーションはデザインしてならない
花村周寛 318

座とコミュニケーションをめぐって —— 対談　小林恭×高田珠樹
小林恭　高田珠樹 328

［メッセージ］
コミュニケーションデザイン・センターの使命？　金水敏 344

編集後記 346